

高齢者の安全運転に
どう貢献できるか。
新たな道を探り続ける。

人間情報学部
人間情報学科
講師

高原 美和

【学 歴】

1998年3月 東京都立大学経済学部経済学科卒業
2001年3月 甲南大学文学部人間科学科卒業
2004年3月 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了
2007年3月 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了

【職 歴】

2007年4月 大阪大学大学院人間科学研究科特任研究員
2007年11月 東京工業大学大学院総合理工学研究科産学官連携研究員
2008年9月 株式会社豊田中央研究所客員研究員
2011年4月 愛知淑徳大学人間情報学部講師



企業の研究で高齢者の認知機能や行動特性などを研究し、安全運転のためのシステム開発に貢献してきた高原先生。近年は安全教育にも関心を高め、視野を広げて次代の交通社会を見据えています。「私は興味のあることに次々と飛び込み、研究者の道を拓いてきました。学生たちにも自分の可能性に自信を持ち、力を出しきってほしい」と期待を寄せています。

「人間の行動特性を明らかにして、モノづくりやサービスに応用する」ということが、私の大まかな研究の方向性です。具体的には、高齢ドライバによる事故が多い場面から、行動の問題点を明確化し、その環境にふさわしい行動を起こせるような運転支援を提案するというものです。

以前、自動車関係の研究所に所属していた時は、出会い頭事故という観点から、閉鎖コース内に信号のない交差点を設置し、運転行動を観察しました。結果、「標識の見落とし」、「停止が不十分」、「確認回数が少ない」といった高齢ドライバの特徴が示されました。支援としては、この全てに對する音声ガイドを提案しました。

このように書くと、「やっぱり高齢ドライバは危ない!」とか「免許返納だ!」といった

意見が聞こえそうですが、実験や調査で高齢者の方と接していると、「高齢者」とひとくくりできない現実が見えてきます。実際に前述の実験でも、特に危険な「標識の見落とし」は、ごく一部が繰り返していることがわかりました。つまり、個人差が大きいのです。

今後としては、高齢者の個人差、特に日常生活は健常なのに危険な運転をしてしまう人をどうやって見分けるか、という点に興味を持っています。何か簡単なテストで見つけられれば、危険な高齢ドライバへの個別の対策が考えられるはずです。人はいずれみんな高齢者になるわけですから、自分が高齢者になった時に、単に高齢だからではなく、根拠を以て運転の可否を判断してもらえ、社会になるといいなと思っています。

高原先生の主要著書・論文

- 情報福祉の基礎知識―障害者・高齢者が使いやすいインターフェース―
「加齢に伴う注意・認知機能とメンタルワークロード」(共著)2008、ジヤアース教育新社
- 高齢ドライバにおける一時停止標識見落とし要因の検討(共著)2011、自動車技術会論文集(Vol.42、No.2)
- 交差点通過時における左右確認行動の年齢差(共著)2011、交通科学研究会(Vol.41、No.2)
- 高齢者・視覚障害者の道路横断支援のためのLED付首響式信号装置の
実用化可能性検証(共著)2011、交通工学研究会(第46巻、第4号)
- 高齢ドライバにおける一時停止支援システムの研究(共著)2011、IATSS Review(Vol.36、No.1)
- Regional Frontal Gray Matter Volume Associated with Executive Function Capacity as a Risk Factor for Vehicle Crashes in Normal Aging Adults.(共著)2012、PLOS ONE(Vol.7、Issue9)

